

**「地域」の魅力を
「旅」の「作業特性」から考える
—地域作業療法学原論の試み—**



日本地域作業療法研究会

2014年2月23日

於：久留米医師会館

聖隷クリストファー大学 田島明子

はじめに

- 筆者は2012年11月に言語聴覚士である故遠藤尚志が行ってきた失語症友の会海外旅行団に同行し、失語症者とそのご家族と共にドイツを旅してきた
- 旅は行動への意欲を生じさせ、「また行きたい！」と障害を持つ人たちに思わせるものだった
- 旅はハードルの低くなった作業活動
- しかし、魅力ある作業活動の魅力の要因・要素を作業の特性から十分には解読できていないのではないか。



- 本研究では、「旅」を労働／余暇、定住／漂泊の2軸からとらえ、作業的特性を明らかにする
- 「地域」を「作業特性」から描く試みの意味・意義を浮き彫り、その端緒とする

分析方法

- ① 先行文献より、労働、余暇、定住、漂泊の特性を明らかにする。
- ② 労働／余暇、定住／漂泊から成される4象限に本研究の主題である「旅」を位置づける。
- ③ ②より、「旅」の該当する象限の特性を明らかにすることにより、「旅」の作業特性を明らかにする。



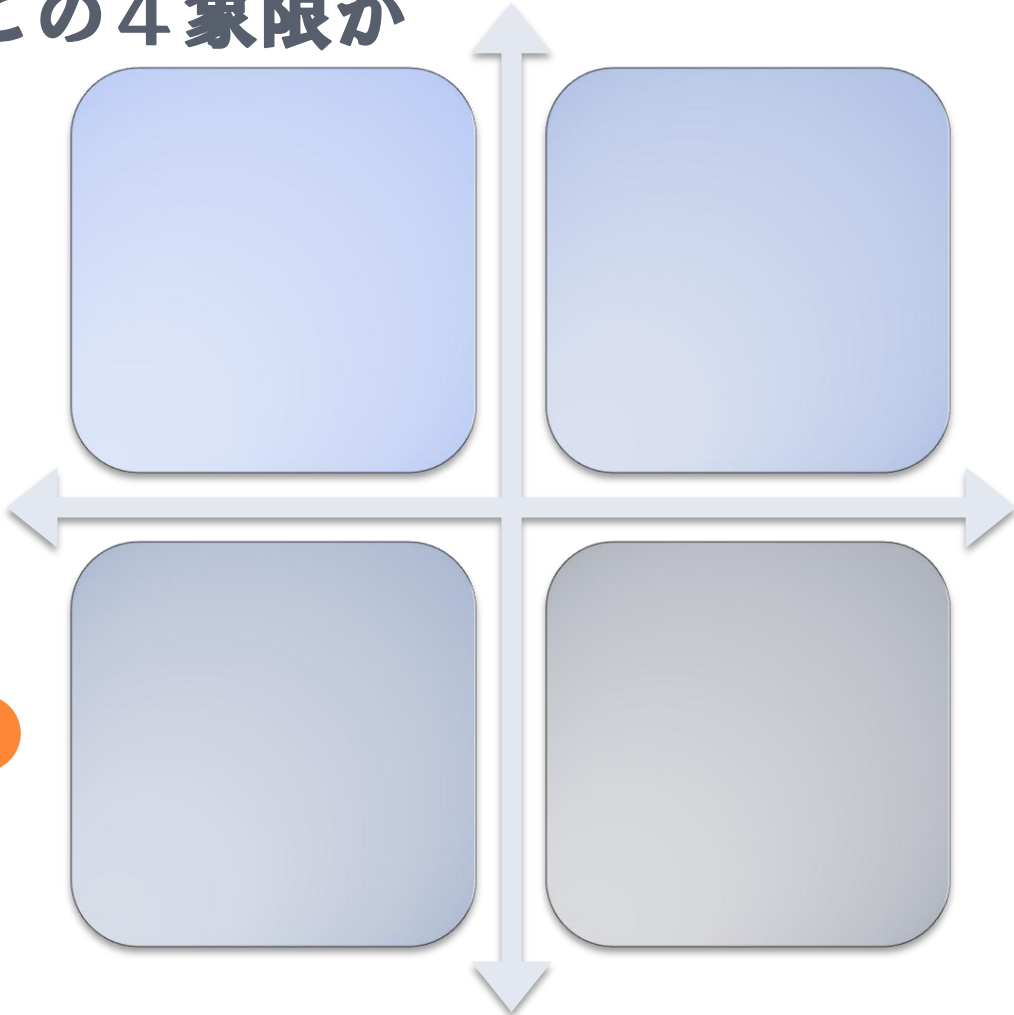
結果1 : なぜ

この4象限か

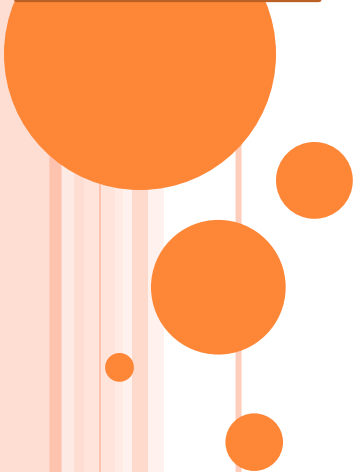
労働

定住

漂泊



余暇



労働と余暇

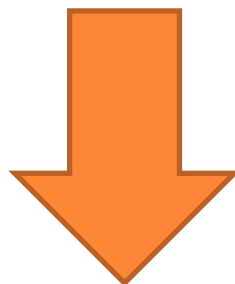
Pieper, J (1965) / 稲垣良典訳 (1988) 「余暇と祝祭」 講談社学術文庫
によると・・・

- 「労働」とは始めから終わりまで苦勞と骨折りだ、という立場に対立して、「余暇」は苦勞から解放されて祭りを祝う人の態度に象徴されます。
- 「余暇」は「労働」の概念にふくまれている社会的機能、実益への奉仕という側面にするとく対立しています。
- ドイツ語では「仕事の終わり」「休み時間」を意味するFeierabendという言葉がありますが、文字通りにいえば、「祭りの前夜」つまり「お祭り気分」ということです。このように、「休息と「祭り」を結びつける考え方、それが真の「余暇」についての私の考えの核心となっています。
- 聖書に「神はおつくりになった業からしりぞいて休み、すべては大変よいことを御覧になった」（『創世記』第1章第31節）と記されていますが、私たちの余暇のなかにも、このような神のまなざし、「コンテンプラチオ」が余暇の本質だといえましょう。
- 余暇というものは、人間がただ本当の自分自身と一体になる——「怠惰」はこのように一体になりえないところから出てくるものでした——だけでなく、世界全体のリズムと調子が合うときにうみだされるものです。余暇を支える「いのち」とは、このような肯定の態度です。

定住と漂泊

鶴見和子 1993 「漂泊と定住と」 ちくま学芸文庫
によると・・・

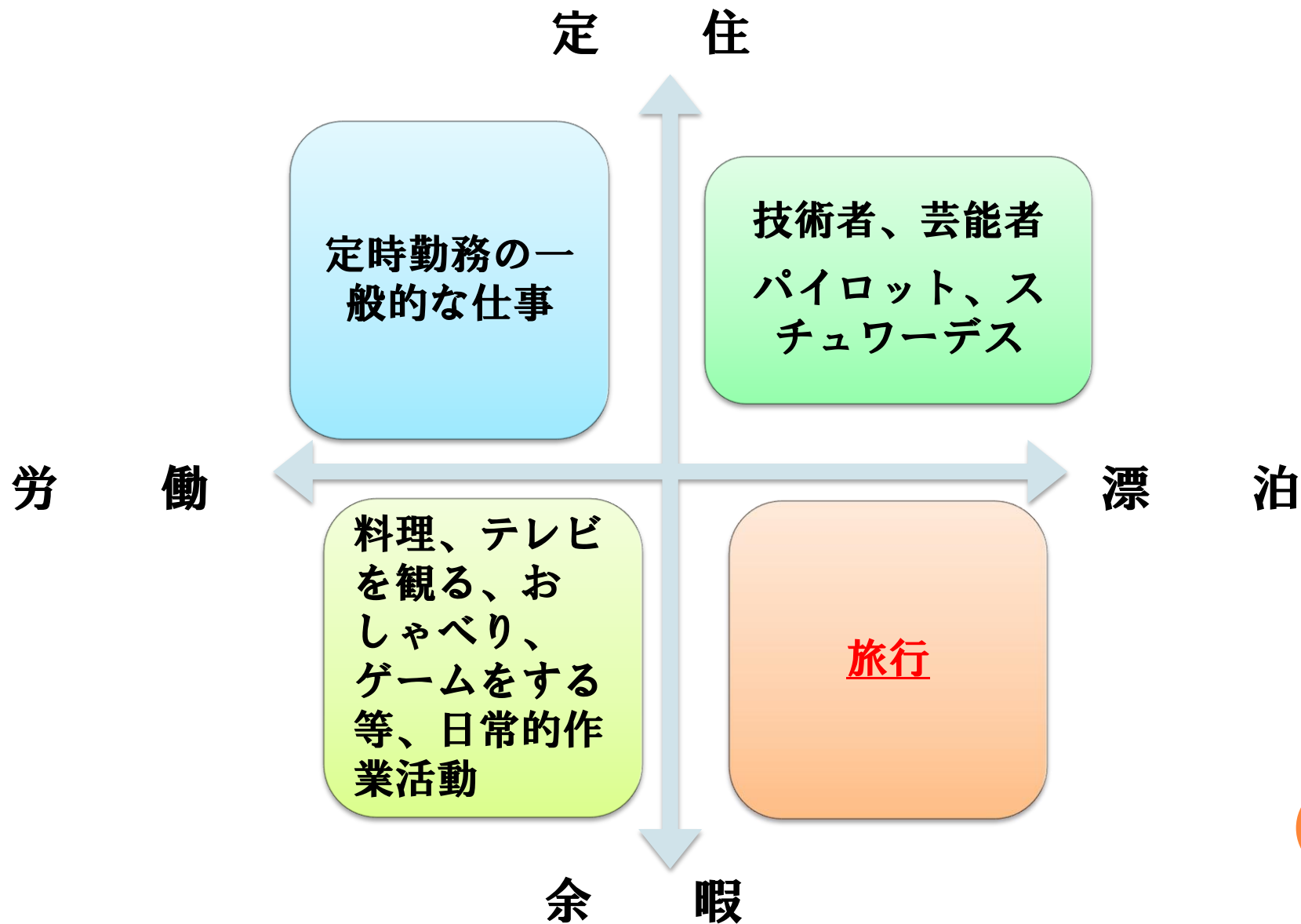
- 柳田國男民俗学における社会変動の理解を助けるもの－漂泊、定住という概念
- 定住民としての常民は、漂泊民とのあいによって覚醒され、活力を賦与される。また他方では、ひごろは定住している常民が、あるきっかけで、一時的に漂泊することによって、新しい視野がひらけ、活力をとりもどす。
- 一時漂泊と生涯漂泊（旅＝一時漂泊）
- ある特定の地域共同体に定住する人々はそこに永年定住することによって、視野狭窄となり、惰性に流されやすい。精神的活力の枯渇をきたし易い（ケガレ）。その時に、元気をとりもどす方法は、2つある。1つは、旅に出ることである。もう1つは、外から来る漂泊者を迎えて、あたらしい知識や信仰や技術を学ぶことである。そうすることによって、共同体の外の世界と、自己の生活とを比較する視野がひらける。比較によって、一時漂泊および、漂泊者とのあいには、自己覚醒の作用をもたらすものである。



**「旅」の意味・意義が労働、定住
との対比で浮かび上がる**



結果 2 : 4 象限内の旅の位置



結果3：「旅」の作業特性

「旅」は「余暇」のなかにあって
「余暇」本来の性質を色濃くする性質を持ち
労働・ケとの対極に位置し
祭・ハレ・マツリの本質と同様

人にゆさぶりや覚醒を通して
本来の自分に立ち返ることを牽引する
特質を持つ作業



考察

- 「旅」を経験した障害当事者の生きる意欲の理由は上述の「旅」の作業特性を踏まえると理解が深まると考える。
- こうした作業により、「地域」の「作業活動」の特性を明らかにしていくことで、「作業特性」から「地域」の魅力を浮き彫ることに貢献できるだろうと考える。今後の課題としたい。

